

出生前診断の行われた2,3の興味ある症例について

(分担研究:新生児外科的疾患に関する総合的研究)

土田嘉昭, 佐伯守洋, 本名敏郎

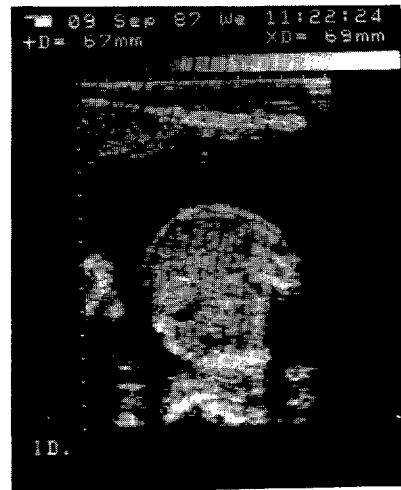
要約: 昭和62年1年間で経験した新生児外科症例のうち出生前診断がなされた2例について報告する。1例は21 Trisomy, 食道閉鎖, 臍帯ヘルニア, 口唇口蓋裂, Perineal groove など多彩な奇形をもつ例で, その大部分が繰り返す超音波断層法, 胎児造影によって出生前に診断されており, 又他の1例は典型的な超音波像と胎児造影所見を呈した先天性十二指腸狭窄症である。超音波断層法, 胎児造影および羊水染色体検査により, かなり細部にわたって胎児奇形を出生前に診断する事が可能である事が確認された。

見出し語: 出生前診断, 先天性食道閉鎖症, 先天性十二指腸閉塞症

昭和62年1月から12月までに国立小児病院外科で治療した新生児外科的症例のうち, 出生前に諸種の検査により興味ある所見の得られた2症例について報告する。

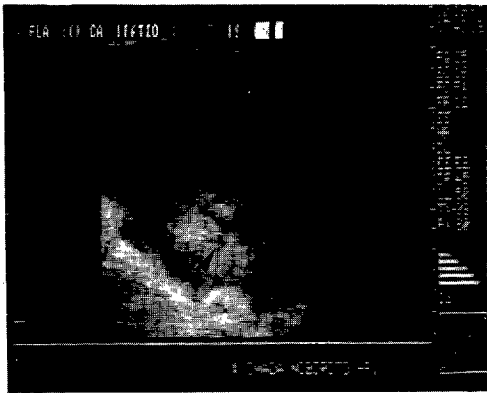
症例1, 金〇元〇, 女児, 在胎37週, 体重1806gで出生。家族歴に著患なく, 母体妊娠歴に著変を認めない。在胎31週の時母体腹囲の増大に気づかれ, 超音波検査が行われ, IUGR (intrauterine growth retardation), 羊水過多の診断がなされた。改善の傾向がないため33週目に入院精査を受けた。この時点で超音波検査上胃泡の欠如, 単一臍帯動脈, 手関節屈曲拘縮, IUGRが認められた。(右図)

続いて35週目上部消化管閉塞および多発奇形か



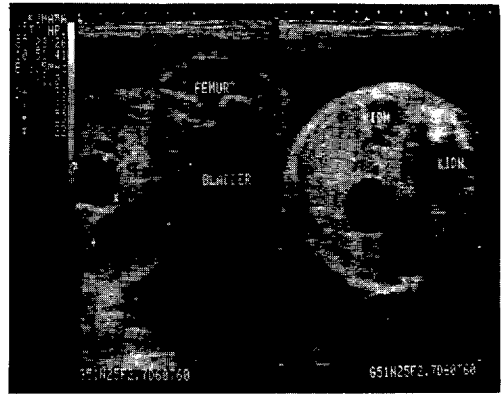
国立小児病院外科 (Dept. of Surgery, National Children's Hospital)

ら染色体異常が疑われ、羊水穿刺、胎児造影が行われた。染色体分析は失敗したが、造影では造影剤は注入後24時間を経ても胎児消化管内には移行せず食道閉鎖症の可能性が強く示唆されたが、食道の上部盲端は造影されなかった。ついで36週目の超音波検査では前記の所見以外にその前額面断層で口唇裂が認められた(下図)。

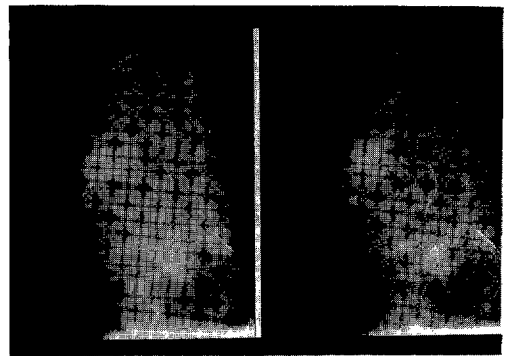


その後在胎37週で出生したが、経鼻カテーテルが挿入出来ず、食道閉鎖症と診断され当科へ転送された。食道閉鎖症(Gross C型)以外に臍帯ヘルニア、口唇口蓋裂、Perineal groove、心奇型(Coarctation complex)が認められ、顔つきなどから18 Trisomyが疑われた。生後4時間で胃瘻造設、食道banding、腹壁閉鎖が行われた。術後染色体分析により、18 Trisomyが確認された。

症例2、○本○子、女児、在胎38週6日、体重2185gで出生。家族歴に著患なく、母親妊娠歴に著変を認められない。在胎37週まで近医にて診察を受けていたが、腹囲の急激な増大のため某病院を受診し、羊水過多の疑いで超音波検査および胎児造影を受けた。超音波検査では右上図に示す如く、上腹部に二つの anechoic areaが認められ、十二指腸閉塞の疑いがもたれ、胎児造影が行われた。



胎児造影では造影剤(リビオドール[®]、ウログラフィン[®])は胃および十二指腸内にとどまり、先天性十二指腸閉塞が疑われ、出生とともに当院へ転送された。下図は胎児造影の所見を示す。



当院来院時の腹部単純レ線写真では、double bubble signが見られ、胎児造影の際の造影剤が胃、十二指腸および結腸内に認められた。よって完全な閉塞ではなく先天性十二指腸狭窄症と診断された。術前血清電解質の異常が発見されたため、手術は生後4日目に行われた。輪状臍を伴う十二指腸狭窄症で、十二指腸十二指腸吻合を行い、術後の経過は極めて順調であった。

考察

第1例は、18Trisomyを基礎にもつ多発奇形例であるが、小さな臍帯ヘルニア、perineal grooveおよび coarctation complex を除き他のほとんどの奇形が出生前に診断されている。本例は3回に亘り超音波検査を受けており、そのいずれの場合にも左上腹部に anechoic area つまり胃泡を欠いており、食道閉鎖症が強く示唆された。さらに上縦隔に上部食道盲端が確認されれば一層診断が確実になると考えられる。胎児造影でも24時間後も造影剤は胎児消化管内には認められずこれも食道閉鎖の診断を支持すると思われる。しかし出生後の単純X線写真上腸管内に造影剤が認められており、気管食道瘻を介して胎児消化管内に入ったものと考えられ、連続的に撮影する必要があると思われた。近年奇形の出生前診断も進歩しているが、本例の Coarctationを診断する事は比較的困難と考えられる。また本例では羊水からの染色体分析には失敗をしているが、超音波検査を繰り返し、羊水穿刺、胎児造影を行えばかなりの体表および内臓奇形を出生前に診断する事が可能であると思われた。

症例2の超音波像は典型的な double bubble sign を示しており、また胎児造影でもタイミングよく拡張した胃および十二指腸が描出されており、出生前診断には困難は感じられない。本例でも21 Trisomy の合併を考慮して羊水からの染色体分析を行うべきであったと考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:昭和 62 年 1 年間で経験した新生児外科症例のうち出生前診断がなされた 2 例について報告する。1 例は 21Trisomy, 食道閉鎖, 臍帯ヘルニア, 口唇口蓋裂, Perineal groove など多彩な奇形をもつ例で, その大部分が繰り返す超音波断層法, 胎児造影によって出生前に診断されており, 又他の 1 例は典型的な超音波像と胎児造影所見を呈した先天性十二指腸狭窄症である。超音波断層法, 胎児造影および羊水染色体検査により, かなり細部にわたって胎児奇形を出生前に診断する事が可能である事が確認された。